

学校経営方針

校長 加藤 敏

基本理念「安心の鮫浜・驚きの鮫浜」

- 確かな学力を身に付けさせ、最後までやり抜く強い意志力をはぐくむ学校 -

はじめに

1 『安心できる学校』 - 保護者が学校に求める7つの安心 -

「安全」子どもの命を預けていられる安心

「健康」子どもの心身の成長がみられる安心

「いじめのない人間関係」子どもが友だちと仲良く楽しく過ごせる安心

「基礎的学力」子どもが生活する上で必要とする知識と能力・技能が身に付けられる安心

「基本的市民性と知恵と意欲」子どもが社会に出て生活し、社会の中で自己実現するために必要な力が身に付けられる安心

「豊かな感性と知性」子どもの個性と人間性が豊かにはぐくまれる安心

「学校生活の情報」子どもの学校での生活のようすがわかる安心

子どもたちが創立134年の本校の歴史と伝統に誇りをもちながら、生き生きと学校生活を送り、子ども時代を子どもらしく豊かに生きるための教育を推進していくためには、このような保護者が学校に求める7つの安心」に応える必要がある。

2 『使命を自覚する学校』 - 子どもには学ぶ義務があり、大人には教える責任がある -

教育とは、人格の完成を目指すとともに、子どもたちが大人になった時に、自分たちが生きる社会を自らの力でより良い社会へ変容させていくために必要な力をはぐくむ営みでもある。

特に、これからのわが国は、加速度的に進む人口減少とそれによる急速な高齢化が、経済や社会の様々な変化をもたらすことは確実であり、平和・福祉・環境問題など後世まで取り組んでいかなければならない地球規模での諸課題が山積している。次世代を担う子どもたちが、そうした課題に取り組みながらより良い社会を築き、自らもより良く生きていくためには、今から身に付けておかなければならない必要な力がある。その力を学び、身に付けることは、子どもたちの義務である。したがって、子どもには「学ぶ義務」がある。

一方、学校という専門の空間と時間と教材教具や施設等の指導環境を得て教育に携わる我々には、教育の専門職として、また教育活動を支える者として、子どもの「学ぶ義務」の重要性を深く認識し、「子どもが身に付けなければならない力を教え育てる責任と使命がある」ことを基本理念とし、教育を行わなければならない。

3 『常に具体的な教育を実践する学校』 - 新たな教育開発と着実な指導実践を進める -

私たちは、目の前の子どもの実態を踏まえて教育を行う実践者である。したがって、学校として、常に具体的な事実をもとに、具体的な内容で教育課程を編成し、それに基づいて具体的な指導実践に努めなければならない。

本校は、「子どもには学ぶ義務があり、教職員には教える責任がある」という学校経営の基本理念に基づき、小規模校のメリットを生かした教育活動の充実に努めている。また、学力調査や

学校評価の結果で明らかとなった、国語と算数を中心とした基礎的・基本的な知識・技能の習得と活用、あいさつや言葉遣いなど基本的な市民性の育成、さらには、豊かな感性や表現力の醸成などの課題解決に向けて、具体的・実践的な指導を進め着実に成果を出してきた。

しかしそうした中で、小学校入学後も集団適応ができず自己中心的で幼児性の抜けない児童が増えてきているという問題や、中学校において予習・復習等の家庭学習習慣がなく、授業についていけずに学習意欲を失い、問題行動に傾く卒業生の問題にも直面している。

私たちは今こそ、義務教育制度の枠組みを見直す「プラン21」の視点に基づき、就学前教育から中学校教育までの一貫した視野で、新たな教育活動に取り組む必要がある。そのため、就学前の幼児と保護者啓発のための小学校体験入学 算数の習熟度別指導時間の特設 家庭学習習慣の定着と家庭の教育力を高める「さめはま学習帳」の開発 中学校指導の実践を踏まえた5・6年の英語指導の開発 6年児童の中学校生活体験、5・6・7年の教員集団による合同学年会の実施など、幼・保・中と連携しながら、プロジェクト体制で教育活動を開発し、着実な実践をとおした新たな『学校づくり』に引き続き取り組むこととする。また、5年児童の中学校1日体験学習など、更なる小中連携教育の充実に向けた工夫を考える。

さらに、子どもたちの実態と学校の実態を踏まえ、具体的な指導内容を明示した教育課程を編成し、その内容を『学校の自己評価項目』として位置づけてきた。今年度も、この教育課程に基づき、全ての教師がそれぞれの校務分掌に関わる教育活動を着実に実践し、自らの職責を果たしていく。

4 『品川区教育改革を推進する学校』 - 新たな品川区の教育目標を生かす -

平成21年度から、区教育委員会の教育目標・教育方針が大きく変わった。特に、本年度はすべての区民が、子どもたちが、学校・家庭・地域社会が、区民がというように、教育目標を達成するための主体が明示され、より具体的に目標が示されている。

これは、「品川区という自治体の中での教育」という位置づけが色濃くだされたものであり、子ども・保護者・地域のための「おらが学校」という意識を改めてもち、常に実態を踏まえた教育活動を行う必要があるということである。この考え方を実現するために、地域の中学校・小学校・幼稚園・保育園との連携を一層深め、就学1年前から義務教育9年生までの子どもの成長を見通した小中一貫教育を組織的・継続的に取り組んでいく。

基本理念（目指す学校の姿）

「安心の鮫浜・驚きの鮫浜」

保護者・地域・同窓生が求める「安心」に応え、子どもたちに確かな学力を身に付けさせ、自らの個性や能力を存分に発揮し、最後まで粘り強くやり抜くことで、満足感や達成感を味わえる様々な活躍の場のある学校。

「がんばることは快感」「ルールを守ることが気を楽しんで生活できること」「豊富な成功体験による自己肯定感」を子どもたちに実感させることのできる学校を実現する。

教育目標

(1) 小中一貫教育目標

地域に誇りをもち自分の人生を切り開くことができる確かな学力と正しい判断力を身に付けた、人間性

豊かな児童・生徒の育成を目指し、鮫浜小学校、立会小学校、浜川小学校、浜川中学校の四校は、次の教育目標を掲げる。

進んで学ぶ子 心を磨く子 元気でやりぬく子

(2) 児童目標

全ての子どもが心身ともに健康で知性と感性に富み、生きがいのある学校生活をすごすことができるよう、小中一貫教育目標を踏まえ、次の児童像を目標として掲げ、全教育活動を推進する。

深く考え工夫する 子ども 心豊かな 子ども いつも元気でやりぬく 子ども

特に、基礎基本の知識・技能の確実な習得と活用力の向上を図る授業の工夫と、家庭・地域と連携した系統的で特色のある市民科指導の徹底に努め、一人一人の子どもが自主・自律の精神をもって学び、人権と社会規範を守って行動できる人づくりを推進する。

経営の重点

- 1 子どもの命と安全を守り、心身ともに健全な成長を図るために、保護者・地域・関係諸機関と連携し組織的な対応に努める。

子どもは社会の宝であり、子どもの健やかな成長は、全ての大人の願いである。痛ましい事故や卑劣な事件が後を絶たない今日、子どもの命と安全を守り、心身の健康を保持増進することは、学校が直面する重要課題である。そのために、保護者・地域・警察等関係機関との連携を強め、全教職員一人一人が気持ちを緩めることなく安全対策を徹底する学校を実現する。

〔方策〕

全教職員が危機管理能力を高め、校内事故ゼロを目指す。

特に、十分な教材研究と児童理解のうえに立った教育活動を心がけ、指導中の事故防止に全力を尽くす。

不審者被害を許さない防犯意識と万全の体制をもつ。

校内への不審者侵入と校外での不審者被害を防ぐために、全教職員が防犯意識をもって外来者へのあいさつや声かけを励行する。また、不審者侵入を想定した訓練を行い、非常事態に落ち着いて対処できるよう備える。

また、「まもるっち」の充電と児童の携帯徹底を指導し、保護者へも要請する。

地域の実態を把握し安全指導に生かす。

交通事故や不審者被害を防ぐために、計画的に地域巡回を行い、交通事故等も含めた地域の安全状況を把握し、指導に生かすよう努める。また、地域祭礼等、夜間に児童が外出することが予想される地域行事には、全教員が巡回に当たる体制をとる。

全校体制でいじめ・不登校ゼロを目指す。

全教職員が受容と共感に満ちた教育相談的な態度で児童に接し、わずかな表情や言動の変化を見逃すことなく、情報を共有化し、学級担任を中心に全校体制で早期解決を図る。特に、特別支援コーディネーター、養護教諭、スクールカウンセラー、関係機関との連携を密にし、専門的な見地からの助言を受けるとともに、常に管理職や同僚に報告・連絡・相談を行い、一人で問題を抱えることのない開かれた学級・専科経営を行う。

- 2 子どものもつ個性と多様な能力を引き出し、学習内容の確実な定着と社会で生きる力の育成に全力を尽くす。特に、子どもの表現力を学力につなげるとともに、ものごとを深く考え、困難な課題を自分で乗り越えることのできる強い意志力を育む。

自らの可能性と未来に向かって、生き生きと意欲的に行動し成長していく子どもを育てることは、私たちの願いである。そのためには、子どもたちが基礎的基本的な知識や技能の習得・活用等の「学力」や困難な課題に対して自ら解決し乗り越える強い「意志力」をもつことが不可欠である。

本校児童は、親密度が高く、思いやりのある集団を築き、安定した学校生活を送っている。しかし、自分の気持ちや考えを素直に表現できなかつたり、互いに遠慮し自ら進んで行動しなかつたりする面も見られ、そのことが積極的な「学力」や「意志力」をもつことにつながっていないという姿にも影響している実態がある。

積極的で自信にあふれた表現力を高めることにより、意識や技能、自分自身や他者・社会・ものごとなど、深く見つけ考える力を養い育む学校を実現する。

〔方策〕

はじめのある授業を行い、基礎基本の学力の定着を図る。

本校の学力定着度調査結果を見ると、子どもたちの学力は着実に向上しているが、読み取りの力や表現力、算数では少数や文章題等に課題があることがわかる。特に、課題に対して集中して粘り強く取り組む姿勢を育てる必要性があることは、全学年に共通した課題である。

そのため、「学習のきまり」を徹底して指導し、はじめのある授業を行うことに取り組んできた。このことにより授業への集中力が増し、基礎基本の学力を確実に身に付ける下地が出来上がってきた。このうえに、指導方法をさらに工夫・充実させ、学力のレベルをあげる授業を行っていく。そして、中学校入学までに身に付けさせたい基礎基本を中学校教師から提示してもらい、身に付いているかどうかの検証方法を小中で共同開発する。

望ましい生活習慣の基礎を教え、基本的な社会性の定着を図る。

本校児童には、親密度が高く思いやりのある集団を築いている良さがある反面、自分の気持ちや考えを素直に表現できなかつたり、互いに遠慮し自ら進んで行動しなかつたりする面も見られ、これまで全教員で「表現力を高める場と工夫」に取り組んできた。また、言葉づかい、あいさつ、集団行動でのルール、給食マナー、清掃の仕方など基本的で望ましい生活行動が身に付いていない実態もあったが、「生活のきまり」を基本とした全学年共通の指導内容と方法を、日常的に積み重ね、望ましい生活習慣を着実に身に付けさせることができている。さらに、全教育活動を「市民科」の目標から捉えなおし、全体計画と指導計画を系統的に見直して、社会性豊かで克己心あふれる子どもの育成を意図的計画的に行っていく。成功体験を重視し、子どもの個性と能力、自信と意欲を引き出す。

子どもが社会で生きていくために必要な力は、いわゆる教科の基礎基本の学力とともに豊かな感性や芸術性、運動能力、人間関係形成のためのコミュニケーション能力など様々である。本校の子どもには、特にそうした力を引き出し、自信と意欲のあふれる生き方ができるようしていきたい。そのために、日常の教育活動の中でアイデアあふれる指導を実践したり、様々なコンクールやコンテスト、地域行事、運動クラブ等への参加を促したりすることとおして、子どもたちの経験、特に成功体験を増やすようにしていく。

教職員が相互に啓発し指導の組織性を高める。

小規模校であるため、教職員の職務分担は多岐に渡り、その一つ一つの責任は極めて重い。本校の教職員は、誰もが労を惜みず、学校全体を視野に入れて緻密な計画を立て職務遂行に全力を尽くしている。また、その一つ一つについて共通理解を怠らず、相互扶助の精神で組織的に校務を成し遂げようとする姿勢は、まさに「学校は、組織体として教育を行う場である」ことを実証した姿であるといえる。

また、前例踏襲にとらわれがちであったこれまでの取り組みから、教職員それぞれが、各自のキャリアや校務分掌に応じて、開発的な取り組みに挑戦するようになってきた。さらに、教職員それぞれがもつキャリアや教育に対する感性等を互いに学びあう研修会を自発的に行うなどの意欲的な実践もなされている。こうした相互啓発の姿勢を教職員風土として定着させ、さらに組織的で強固な理念と実践力のある教育活動を展開していく。

- 3 全ての教職員が、子どもの成長に大きな影響を及ぼしていることを自覚し、指導力と職務遂行能力を高め、学校としての教育力の向上に全力を尽くす。

教職員は、それぞれ子どもへの有形無形の関わりによって、その心と体の健全な成長に大きな影響を及ぼしている。全教職員がそのことを深く自覚し自己研鑽に励むとともに切磋琢磨し合い、教育力の高い学校を実現する。

〔方策〕

「率先垂範」

教職員の姿は、児童にとって常に模範である。教職員一人一人が公務員・教育公務員として自覚をもち、服務に厳正であること。また、教育目標や生活指導目標など、児童に求める姿は、教職員自身が日々自らにも求め実践しなければならないことである、という考えに立ち、児童の範となる言動を心がける。

「自己申告と自己評価の実践」

学校の教育活動は、確かな教育計画と予算に基づき安定した状態で行わなければならない。そのためには、教職員一人一人が年間を見通して自己の職務を計画し、その着実な遂行に努めることが大切である。特に、教師は、教育課程・指導の重点の内容に基づき、それぞれの校務分掌に関わる教育活動を自己申告書に具体的に明示するとともに、学級・専科経営方針を策定し、その確実な実践に努力する。また、学校組織としても、各学期末ごとに教育課程の項目を自己評価し、常に学校の教育力の充実向上を目指す。

「授業評価」

学校生活のほとんどは授業である。児童が生き生きと進んで勉強に取り組んでいる授業ほど教師として充実感を覚えるものはない。そのためには、常に教師が授業を評価し、不断の工夫・向上に努めなければならない。

評価手段として最も大切なものは、何よりも、教師自身による自己評価である。児童の学習成果のみならず、常に「授業中の児童の姿そのものが第一義の授業評価の表れ」ととらえ、授業の質と成果を真摯に見つめる方法を開発・実践する。

さらに、外部評価者による授業評価や学校公開等における保護者アンケートの声などを真摯に受け止め、自己評価と合わせて授業の一層の充実を努める。

特に、毎学期に実施する学校公開や学校行事等において保護者・教員、児童の三者に一年間同じ項目でアンケートを継続実施し、実態の変容を把握し指導の充実・向上に生かすこととする。

「自己研鑽」

小中一貫教育や今日的な教育課題に正対するため、特に教師には、これまで以上に高い指導力・授業力が求められている。児童の実態と学校の実態を踏まえ、自らが果たさなければならぬ役割を深く認識し、日々の同僚との学びあいや諸研修会への積極的な参加、研究会の仲間との切磋琢磨等、自らのキャリアプランを見直すとともに、一貫教育グループ内の小学校へも積極的に授業参観等を行い、資質・能力を高めるため一層の自己研鑽に励む。

「説明責任」

全ての教育活動が税金によって営まれる公立学校教育においては、誰もが施設設備や教材教具等を大切に使用するとともに、予算根拠を明確にして組織的計画的に諸活動を行うことが重要である。教育効果を十分に達成するよう努め、その用途を事前に保護者に説明し理解を得ておくとともに、成果も様々な方法で明らかにし、公務員として常に説明責任を果たせるようにする。

4 子どもに自信と積極性を育てるため、家庭・地域との協働教育に努める。

児童にとって、家庭・地域は学校と同様、教育を受ける大切な場である。品川区小中一貫教育に設けられた「市民科」はもとより、将来にわたって生きる力を育成するためには、学校だけで指導が完結するものではない。

そのため、学校の現状と課題を積極的に家庭・地域に開き、共通理解のもとに家庭や地域との協働教育を進める学校を実現する。

〔方策〕

学校に関する新鮮な情報を多様な方法で家庭や地域に開く

保護者は、子どもの学校での生活の様子を知りたいと願っている。様子が具体的にわかるほど、学校との共通理解は深まり、協働教育も可能となってくる。また、情報は、新鮮でなければ価値が薄れる。特に、学級担任は、連絡帳等で保護者との連絡を密にし、保護者の信頼を得るよう努めることが大切である。

また、学校・学年・学級だより等の広報紙のほかに、児童の作品等の掲示・展示や学校掲示板、ホームページ等をこまめに更新し、学校が取り組んでいる教育活動の目的と意義、成果を的確に家庭や地域に知らせ、理解と協力を得るよう努める。

地域の教育力を積極的に取り入れた授業等を推進する。

特に、地域学習や読書指導、鮫浜タイム、校外学習、学校行事など様々な教育活動において、ゲストティーチャーや保護者ボランティア、保護者等の同行による協働教育を進んで計画・実践するよう努め、多くの人と係わることで社会性を身に付けさせる。

P T A や同窓会、町会等の組織と連携を深め、子どもが楽しく過ごすことのできる行事等への参加を促し、地域愛・郷土愛を育む。